

現在の主力商品、発泡スチロール製の折箱の製造工場。スタッフの手作業に支えられている。繁忙期には社長自ら作業することも。



## 伝統の折箱の進化を図り、

## 秋田の食文化のさらなる発展を目指す

高級感あふれる折箱や菓子箱、品質にこだわった自社製品の製造・販売。そして、食べ物以外の食に関わるものならなんでも取り扱う「食品資材の専門商社」として。秋田の人々の生活に溶け込みながら、秋田の食を支えてきた老舗企業の若き3代目、渡部智樹社長の挑戦はまだ、始まったばかりだ。



代表取締役社長  
渡部 智樹  
Tomoki Watanabe

### 折箱の製造から、食品資材の専門商社へ

秋田市東通に本社を構える株式会社折安は創業68年を数える老舗だ。創業者は現社長の祖父。弁当や菓子などを詰める木箱、「折箱」の製造・販売から始まり、現在では食品容器や包装資材、料理道具、箸や食器などの卓上用品、マスクや消毒剤などの衛生用品と、食品産業における食材以外の分野を取り扱う食品資材の専門商社として名を馳せる。顧客は飲食店、和洋菓子店を中心に、病院や福祉施設へとシェアを広げている。

3代目となる渡部智樹氏が社長に就任したのは2015年12月。父である先代社長の急逝がきっかけだった。高校卒業と同時に地元秋田を離れ、東京の大学に進学。卒業後は鉄鋼を取り扱う大手商社に就職し、営業の現

場で活躍していた。父が倒れたという報せが届いたのは2015年10月。幼少期から自社製品を意識し、いずれは秋田に戻る決意を秘めていた智樹氏ながら、予期せぬ早期交代を迎えることとなった。

### 商社マンから、3代目社長へ

サラリーマンとして長い時間を過ごしてきた智樹社長。就任当初は苦労も多かったが、古くから会社を支えてきた従業員たちと、商社時代の経験を頼りに、会社を少しずつ前に進めてきた。前職ではビジネスの規模が桁違いなこともあり、納期や在庫の管理、顧客の管理など、「管理」の面では特に厳しく言われてきたという。「言われる立場から言う立場へと変化はしたが、商社としての押さえどころは身につけていた」と智樹社長。就任してからは、まず在庫やコスト管理の面で手腕を発揮した。

また、商社時代に学んだもう一つのこと「他人と同じことをしない、新しいことに挑戦する」という姿勢だ。商社では前任者から引き継いだ仕事を同じようにやっても評価されない。現状維持ではやがて競争力を失い、淘汰されるからだ。工数やコストの削減、利益や付加価値の増加、といった目標に向け、知恵と工夫が常に要求される。そのため、新しいビジネスを創出するためにアンテナを高く張り、市場や需給を探る習慣が染みついている。着任して1年半、ようやく周囲を見回す余裕ができ、さらなる需要の掘り起こしと新規事業の立ち上げを視野に入れている。

商社時代と大きく変わったのは取り扱う商品だ。食品関連商品を取り扱う上で最も気を付けなくてはならないのは安全と衛生。例えば、プラスチック容器は電子レンジで加熱しても有害な物質が溶け出すことはないか、消毒剤はもし口に入っても影響はないかなど、安全性の確認は怠らない。自社で製造する折箱や紙箱も、接着剤は食品対応のものを使用し、細心の注意を払っている。「食を扱うプロとして安全性は絶対に疎かにしてはいけない」と社長。そうした堅実な企業努力が多くの信頼を得て、消費者の安全を支えている。

### 「折箱」と秋田の「食」で全国へ

現在、智樹社長が最も力を入れているのは発泡スチロール製の折箱だ。弁当や惣菜に使われる食品容器の多くが、安価で手軽なプラスチック製容器に移行している中、おせち料理や仕出し弁当など、高級感が必要とされる場面では、やはり折箱が求められる。材料の色・柄・デザインなど、顧客の要望に合わせてオーダーメイドで製作される折箱は、消費者の目を喜ばせ、食を通して大切な時間を演出するのに一役買っている。競合相手が少ないこともあり、県外への販路拡大にも成功。現在、この折箱の販売先は北海道から関西までの県外の顧客が8割を占めている。今後は機能面でのさらなる進化を図り、付加価値を高める策を練っている。

「秋田で一番成功する可能性があるのは「食」に関するものではないか」と智樹社長。20年ぶりに秋田に戻り、郷土の食べ物の豊富さ、おいしさを再確認し、その可能性を強く感じている。秋田の「食」は県外に発信できる数少ない資源であり、それらを包み、運び、受け取ったお客様が開封したときの感動を生み出すためには容器の力が不可欠だ。そこで今年取り組んだのが、秋田新幹線開業20周年に合わせて、県内の食品事業者と試行錯誤を重ねて作った駅弁「はたちのこまち弁当」だ。「折安」が制作した折箱に「あきたこまち」のご飯をはじめ秋田の食材をふんだんに詰め込んだ。3～6月の期間限定の販売だったが、大変好評を博した。将来的には食品メーカー等とタイアップして秋田の「食」をパッケージ化し、県外に発信する役割も構想している。いつか、智樹社長が前任者をを超える仕事をする日を、私たちは秋田の食の隆盛の訪れとともに、迎えられることだろう。伝統ある企業を受け継ぎ、飛躍させるべく努力する若き社長の成功を願ってやまない。



- A デザイン性の高い折箱は県外の顧客に好評
- B 紙製の菓子箱。県内外の菓子メーカーで使われている
- C 厨房用品、衛生用品と、扱うアイテムは約1000点
- D 食品容器、割り箸、竹串なども、様々な種類の製品が揃う

## 株式会社 折安

〒010-0006 秋田県秋田市東通館ノ越2-12  
TEL.018-834-2262 FAX.018-833-9890  
E-mail oriyasu@joy.ocn.ne.jp

- 創業/昭和24年3月1日
- 資本金/1000万円
- 従業員数/23人
- 営業品目/各種折箱・木箱及び紙器の製造販売、食品容器・包装資材・厨房用品・料理道具・卓上用品の販売